

# 日本学術会議中部地区会議ニュース

No. 131

2011. 10

## I. 平成 23 年度第 1 回日本学術会議中部地区会議運営協議会 (於 富山大学)

## II. 学術講演会 (於 富山大学 黒田講堂会議室)

「脳とこころの科学—人間らしさを求めて—」

金澤 一郎 (日本学術会議前会長)

「人間らしさと精神—脳の健康をめざして—」

松井 三枝 (連携会員：富山大学大学院医学薬学研究部准教授)

## III. 日本学術会議会員・連携会員コーナー

「日本学術会議と東日本大震災」

後藤 俊夫 (第 3 部会員・副部長：中部大学副学長)

「第 20・21 期の学術会議での活動を通して」

小川 眞里子 (連携会員：三重大学人文学部教授)

## IV. 日本学術会議中部地区科学者懇談会コーナー

「日本学術会議第 159 回総会傍聴報告」

中嶋 芳雄 (科学者懇談会富山県幹事・富山大学大学院理工学研究部教授)

# I. 平成 23 年度第 1 回日本学術会議 中部地区会議運営協議会議事録

日 時：平成 23 年 6 月 24 日(金)  
10 時 30 分～16 時 00 分

場 所：富山大学五福キャンパス  
事務局中会議室

- 出席者：・日本学術会議中部地区会議  
運営協議会委員  
異 和行 (代表幹事 第 3 部)  
野村 眞理 (第 1 部)  
松井 三枝 (連携会員)  
林 勇二郎 (第 3 部)
- ・日本学術会議中部地区科学者懇談会  
各県幹事  
丹生 潔 (幹事長 愛知県)  
中嶋 芳雄 (富山県)  
竹内 章 (富山県)  
前田 達男 (石川県)  
山本富士夫 (福井県)  
荒木 信幸 (静岡県)  
高橋 弦 (岐阜県)  
後藤 正和 (三重県)
- ・日本学術会議  
金澤 一郎 (前会長、連携会員)
- ・日本学術会議事務局  
飯島 信也  
幕田 兼治  
石黒 正尚

## 議 事

### 1. 地区会議代表幹事あいさつ

異代表幹事から、開会の挨拶の後、本日の地区会議運営協議会は科学者懇談会との合同で開催したいと提案があり、これを了承した。

### 2. 日本学術会議第 159 回総会の報告について

異代表幹事から、資料に基づき、4 月 4 日～6 日にかけて開催された日本学術会議第 159 回総会について、①日本学術会議の外部評価、②若手アカデミーの設置、③包括的学術コンソーシアの進捗状況、それぞれの報告があった。

また、金澤前会長から、東日本大震災被災地域の復興に向けて、日本学術会議が発出した各提言について説明があった。

### 3. 学術講演会について

異代表幹事から、後刻の「各県幹事との打合せ会」で一括審議したいとの説明があった。

### 4. 地区会議ニュースについて

異代表幹事から、地区会議ニュース (130 号) を発刊したと紹介があった。次いで次号発刊のた

めの原稿執筆者について検討したいと提案があり、次のとおりとした。

○会員コーナー関係記事

後藤 俊夫 (第 3 部)

小川 眞里子 (連携会員)

なお、原稿の締切日は 8 月 15 日とし、後日書にて依頼することとした。

### 5. 平成 22 年度事業実施報告について

事務局から、資料に基づき、平成 22 年度中部地区会議事業について実施報告があった。

### 6. 次回地区会議の開催について

異代表幹事から、資料に基づき、次回開催地は順番により、静岡県になるのでご了承いただきたいと提案があり、これを了承した。

なお、開催時期は事前調整により 11 月 11 日(金)で内定しているとの報告があった。

### 7. 科学者懇談会各県幹事との打合せ会

#### ①科学者懇談会について

丹生幹事長から、科学者懇談会幹事長として挨拶があり、資料に基づき、科学者懇談会の現状について報告があった。

#### ②平成 22 年度科学者懇談会収支について

事務局から、資料に基づき、平成 22 年度科学者懇談会収支について報告を行い、承認した。

#### ③科学者懇談会幹事の交代について

丹生幹事長から、資料に基づき、岐阜県幹事が竹森正孝氏から高橋 弦氏に交代した旨の報告があった。

#### ④日本学術会議第 159 回総会の傍聴報告について

中嶋富山県幹事から、資料に基づき、4 月 4 日から 6 日にかけて開催された日本学術会議第 159 回総会の傍聴報告があった。

#### ⑤学術講演会の進め方について

竹内富山県幹事から、本日の学術講演会の概要、進め方について説明があった。

## II. 学術講演会

場 所：富山大学五福キャンパス  
黒田講堂会議室

進行役：竹内 章（科学者懇談会富山県幹事）

1. 開会挨拶  
遠藤 俊郎 富山大学長
2. 主催者挨拶  
巽 和行 中部地区会議代表幹事
3. 科学者との懇談
4. 学術講演  
「脳とこころの科学—人間らしさを求めて—」  
金澤 一郎  
（日本学術会議前会長）
5. 基調講演  
「人間らしさと精神—脳の健康をめざして—」  
松井 三枝  
（富山大学大学院医学薬学研究部准教授）
6. パネルディスカッション  
（パネリスト）  
西条 寿夫  
（富山大学大学院医学薬学研究部教授）  
齋藤 清二  
（富山大学保健管理センター教授）  
佐藤 徳  
（富山大学人間発達科学部教授）  
角田 雅彦  
（富山大学附属病院講師）  
（司会）  
稲垣 雅則  
（北日本新聞社論説委員長）  
  
\*\*\*講演要旨は、後に掲載\*\*\*
5. 閉会の挨拶  
松井 三枝

### <学術講演会要旨>

#### 「脳とこころの科学 —人間らしさを求めて—」

金澤 一郎  
（日本学術会議前会長）

1. 日本学術会議と脳の研究の歴史、経緯  
最初に、日本の学術会議と脳とこころの科学が

どういう関係にあったかを少しお話ししたいと思います。

学術会議は、昭和 24 年（1949 年）に始まっています。その後、昭和 37 年に脳研究連絡委員会という、解剖学、生理学、脳波学、神経病理学、神経化学、薬理学、臨床神経学、精神医学、脳神経外科学が全部一緒になった相当大的な委員会が発足しました。そして昭和 59 年、脳とこころが分離します。つまり、精神科とそれ以外が分かれるわけです。

しかし、分離したとはいえ、人間らしさを求めたい、脳に関わる研究を推進したいという共通の目的があり、平成 6～7 年にかけて、伊藤正男会長のとときに「脳とこころの科学を進めよう」という運動が中で起こりました。そのときに伊藤先生は、今、われわれが使っているような表現で「脳とこころの科学を推進する委員会をつくりたい」とおっしゃったそうです。ところが、日本学術会議の人文・社会科学系、特に哲学の方から「こころは科学にはなじまない」と言われたので、伊藤先生はいろいろと知恵を絞って「脳の科学とこころの問題」というタイトルを付けました。そして、委員会ができ、日本学術会議から「脳科学研究の推進について」という提言をしていきます。それが今の理学研究所脳科学研究センターの設立につながっていきます。

平成 17 年に日本学術会議は大改革を受け、その結果、研究連絡委員会が全部廃止されます。心理学委員会の中に「脳と意識分科会」ができ、基礎医学系の中に「神経科学分科会」ができ、臨床医学研究委員会の中に再び、脳とこころが結び付いた「脳とこころ分科会」ができました。ということで、分離・再編を繰り返しながらも、今はそれぞれの分野で脳とこころをできるだけ結び付けながら考えています。

#### 2. 社会問題と「脳とこころの科学」

「脳とこころの科学」が社会的問題に対して何ができるかを考えていく必要が今後もあると思いますが、今、本当に憂えるべきことは、子どものこころが変化していることではないでしょうか。

一つは、日本の中学生の自己評価が、中国の中学生に対して非常に低いことです。自己評価についての意識評価を行いました。中学生の段階で「自分は役に立たない人間である」と思う人たちが半分を超えています。一方、中国でそう思う中学生は 4 分の 1 くらいでした。

高校生は、非常に志が低いことが分かります。個人レベルでの高校生の意欲を聞きました。「高い学歴を得たい」「自分の会社をつくりたい」「社会的に偉くなりたい」「外国へ行って見聞を広めたい」という子どもたちがどのくらいいるかを日本、米国、中国、韓国で比較しました。「暮らして

いける程度の収入があれば、のんびり暮らしたい」人が、圧倒的に日本で多いです。また、高校生が受けたと思う教育レベルを問い掛けると、「高等学校まででいい」という人は他の国と比べてもそれほど多くはありません。しかし、大学院修士・博士課程まで行こうという高校生は、アメリカ、中国に比べて著しく低いです。これはやはり憂うべき問題ではないかと思えます。

では、もう少し下の学年ではどうでしょうか。家での勉強時間の調査結果を見ると、中学生で「0時間」が32.8%います。一方、「2時間以上」も4分の1くらいはいます。つまり学ぶことから逃避している子どもがいる一方、学びにまじめに向き合っている子もいます。以上のことから、子どものころの二極化が言えるかもしれません。自分の価値を非常に低く見積もってしまう子どもが、確かに無視できないくらいいるらしいのです。

そうかと思うと、「自分が好きなように行動して何が悪い」という考えの子どもたちもいます。例えば、自分の興味がある図書館の本をナイフやはさみで切り取っている子がいます。司書がそれを見つけて注意したところ、「私がこれを見たいんだから、持って行って何が悪い」と開き直ったそうです。そのことは、ホームレスを殺す中学生と共通点があると思えます。「自分は悪くない。世の中が悪い」と思い込むのです。自分の価値を非常に低く考えてしまう一方で、こういう傾向もあることは大変危ない状況ではないでしょうか。

これはいずれもものの考え方、価値観、頭の中で考えることでしょう。今の状況で脳科学は一体何ができるのかを考えたときに、ストレートにこの問題を扱うことは大変難しいのですが、こういうことを考えながら研究を進める必要があると思えます。

### 3. 脳科学研究の推進を

脳とところを思い描きながら、脳科学研究の推進を図るべきであろうと思えます。その推進役で脳科学のトップでいらっしゃる伊藤正男先生は、25年前にあるシェーマをお書きになりました。

レベルとして一番低いところに、活性物質（神経伝達物質、ホルモン）、膜チャンネル、シナプス可塑性、神経回路網、遺伝などの非常にエレメンタリーなものがあります。その上に認識、情動、制御、条件付け、意識、さらにその上に知・情・意などの高次脳機能があり、その上に自我（エゴ）があるというシェーマが、伊藤先生によって提示されて、われわれは何となく分かったような気になってついていったのです。

しかし、これはその当時の話で、最近、脳の機能を理解するには、分子から脳を研究する、あるいは電気生理学的、画像的にシステムから理解しようとする二つの方向があらうかと思えます。

それがころころを理解するところまでいくには、やはりワンステップが必要です。さらに、ころころを理解したからといって、そのことがストレートに人間を理解するところまでいくかどうかということがあります。

こういう流れの中に、「ころころの理論（Theory of Mind: TOM）」といわれる新しい動きが出てきました。これは他者のころころの動きを類推したり、他者が自分と違う考え・価値観・信念を持っていることを理解することです。単純に「空気を読む」よりも少しレベルが高くて、相手が何を考えているかをよく理解し、それに合わせるなどの形で自分もそう考えていくということです。こういう言葉や考えは、1985年ごろに Baron-Cohen たちが「自閉症の子どもはころころの理論が発達していないのではないか」と言い出したあたりから非常に問題になってきました。

自閉症でのころころの理論の話は、例えばどういうことで理解できるかと言いますと、有名な「サリーとアン課題」があります。サリーとアンが部屋にいます。サリーは持っているテディベアをかごの中に入れて、部屋を出ていきます。その間に、アンはテディベアを取り出して、箱の中に入れてしまいます。ここで、「この部屋に帰ってきたサリーは、テディベアを求めて、最初にどこを探すでしょうか」という問い掛けをします。問い掛けられた子どもは当然、「アンがテディベアを隠したことをサリーは知らないはずだから、最初にかごを探すだろう」と思うわけです。それは、サリーのころころを読めるからです。ところが自閉症のお子さんは、いわゆるころころの理論が十分発達していないために、事実を事実として単純に受け止めてしまい、「テディベアは箱にあるのだから、サリーは箱を探す」と言ってしまう。

こういう機能が働くのは、前頭葉や側頭葉の上の方です。自己内省（自分の昔のことを思い出したり反省したりする）の機能が脳で活発に行われているときは、前頭前野の内側部あたりが非常に活発に活動することも知られています。従って、前頭葉が非常に大事な場所だということは何となく分かります。

一方、ころころの理論とは別に、人間には報酬系があることが何となく理解できるかと思えます。報酬系には、脳幹にあるドーパミン系が関与しているとされています。特にこれが線条体というところに向けて線維をたくさん送っています。この報酬系には、生物学的報酬（水が飲めるなど）、嗜好的報酬（酒、たばこなど）、金銭的報酬（お金がもうかる、安く買えるなど）があります。面白いのは社会的報酬があることです。この社会的報酬とは、褒められたり、地位が上がったり、尊敬されることです。最近、筑波大の安梅勲江先生が「子どもの場合は、褒められると他人を思いやるこ

ろが育っていく」という非常にきれいな面白い結果を出されております。実は、どのような報酬であろうとも、報酬系が働くときに脳の中で活発になる場所は同じ線条体なのです。

この報酬系に絡んで、非常に面白い話を一つします。対象となる大学生にストーリーを聞かせたそうです。そこで自分より優れた人物の存在を知ったときには、脳の中の真ん中から少し外れた内側の前部帯状回というところが非常に活発に働いたそうです。ねたみの中枢です。ところが、ねたみの対象となった人物に不幸が訪れたことを聞くと、ねたみの程度が強ければ強いほど線条体の活動が高くなるのだそうです。つまり、報酬系が働くわけです。「他人の不幸は蜜の味」というのはここから来ています。

つまり、「こころ」の動きが脳の働きで分かってくるという時代にわれわれはいるわけです。こういうことを考えますと、25年ほど前に伊藤先生がつくったシェーマはそろそろ改定が必要ではないか、脳の機能の階層性や、「高次機能」と一口で言うてしまうのはもう無理ではないかと、私は新しい見方を示しました。

覚醒・自己意識、時間的・空間的な見当識、非常に単純な知覚・感覚、非常に単純な運動・行動のエンジンになる意欲や注意、それを後ろから支える情動や気分、自己抑制は、むしろ基本的な脳機能と言えるのではないかと。例えば、記憶は高次脳機能にありますが、情動や気分が悪ければ記憶が十分でないのは当たり前です。意欲がなければ覚えることも覚えられません。

基本的脳機能の上で高次脳機能があります。記憶にも、作業記憶のように非常にプロセスとして簡単なものや、学習をベースとするやや複雑な記憶があり、その上に心像があります。それから、言葉があります。その上にさらに、それを凌駕する超高次脳機能があってもいい。例えば判断、思考、創造の上に乗って、初めて外から見える行動が起こり、外から見えない自我がそこに踊っているというのが脳の機能の階層性ではないでしょうか。

私は、一番下の基本的脳機能が情であり、真ん中の高次脳機能が知であり、一番上の超高次脳機能が意、つまり知・情・意ではないかと考えました。すると、『万葉集』の大家であり、日本文化に非常に造詣の深い中西進先生が、「古代、われわれは文化を持っていたが、その特質は情である。中世の時代は、世界は大航海時代と言われるけれども、知の世界であった。近代は何かというと、意の世界である。知・情・意である」とおっしゃっていました。びっくりして中西さんに先ほどの話をしたら、彼も非常にびっくりされていました。これは単なる偶然かもしれませんが、少しじっくり考えてみたいと思っています。

#### 4. 脳科学のうそ、本当

このように脳の科学に関して、いろいろな知識がわれわれには広がっています。どこかの時点で社会的リテラシーを向上させなければいけないということで幾つか行動していますが、その一端をお話します。

実は脳科学の世界では、いろいろな「神話」といわれるものがあります。例えば、脳では10%くらいしか神経細胞が使われていない、残りはなくてもいいなどと言われます。しかし、誰も見たことがないのです。それから、脳は150億の神経細胞があると言われます。しかし、数えた人はいないのです。

ヒトの脳は世界最高の脳だと言われ、確かに私もそう思います。しかし、本当にすべての面でチンパンジーよりも上でしょうか。例えば、アイちゃんの息子アユム君は、驚くべき記憶力と運動能力を持っていることが分かっています。人間が同じように瞬間的な記憶を保つことができたなら、もっと脳が大きくなるなどいろいろなことがあって大変なのだそうです。また、慶應の心理学の渡辺茂先生はハトについて研究しています。例えば公園のある瞬間の写真を2枚撮ります。われわれがさっと見ただけではほとんど同じ写真ですが、その二つの写真を使ってハトに条件付けすると、完ぺきに違いを理解するのだそうです。人間がすべての面で最高ではないことを、まずは理解しなければいけないのではないかと思います。

次に、脳は乳幼児期に鍛えないと取り返しがつかないと言われていています。確かに、一時は臨界期（クリティカル）などと言われましたが、臨界期はどう見ても物理学の話です。今は感受性期（センシティブ）と言われていています。環境や教育の仕方が脳の発達に大きな影響を与える期間のことです。時期を過ぎると、その能力を獲得・発達させることが簡単ではなくなるだけであって、不可能になるわけではないです。

言語にも感受性期があると知られています。子どものときにトルコ語と英語のバイリンガルになった初期のバイリンガルの人と、20代くらいにフランス語と英語のバイリンガルになった後期のバイリンガルの人を比べて、二つの言語を扱っているときに使われている脳の部位を調べました。初期バイリンガルは全く同じ脳の部位を使っています。ところが、後期バイリンガルの場合はオーバーラップはほとんどありません。つまり、非常にセンシティブな時期があるらしいということです。

年齢と共に向上する能力があるという話は本当です。状況判断能力、人間関係調整能力、物事の本質を洞察する能力、総合的な解釈や判断を下す能力は年齢とともに向上するらしいです。政治家や経営者、芸術家などが高齢になっても現役で活

躍しているのはこういうことによるのではないかとされています。

最後に、認知症は予防できるとはうそか本当か。400人くらいを対象に、18年ほど追ったカナダの研究があります。頻りにボードゲームやトランプをした約100名の高齢者群とボードゲームやトランプをほとんど行わなかった約350名の高齢者群の二つにグループ分けを行うと、明らかにトランプやボードゲームをしたグループは認知症の患者さんが少なかったのです。しかし、これには完ぺきな落とし穴があります。こういう研究をする場合には、二つのグループ分けをアトランダムに行い、一方のグループには「あなたは毎日トランプをやってください」、もう一方のグループには「絶対にやるな」と伝えないと結論は出ません。ところが、これは自分の意欲でトランプやボードゲームをする方々のグループとして100例、そうでない普通の生活をしている方を350例集めていますから比較にならないわけです。しかし、そういうことを全部承知の上で、「The New England Journal of Medicine」はこれをアクセプトしたのです。もちろん、そういうディスカッションを全部含めてですので、それなりの価値はあるのだらうと思います。

---

## 「人間らしさと精神 —脳の健康をめざして—」

松井三枝

(連携会員：富山大学大学院医学薬学研究部准教授)

---

青年期は生涯発達の観点からみると、自己形成の途上にあり、社会へ旅立つまでの重要な時期と考えられる。大学にはこの青年期にあたる若者が多く集まることから青年期を中心とした精神神経機能に着目した。統合失調症は、知覚、記憶、思考、感情、意欲、自我などの高次機能が広範に障害される精神疾患で、幻覚、妄想などの陽性症状や、感情鈍麻、意欲減退、会話・思考の貧困等を中心とする陰性症状からなる多彩な精神症状を引き起こす。好発年齢は思春期から20歳代半ば(青年期)であり、一生の間にこの疾患になる率は、約1%と頻度の高い疾患である。しかも、15歳から30歳までの間で統合失調症の80%が発症するといわれている。思春期や青年期に精神障害が見過されてしまうことで、その後の人生に測り知

れない影響が及ぶかもしれない。統合失調症において、明らかな幻覚や妄想、行動や思考の異常が出現してから、実際に適切な治療が開始されるまでの治療の遅れは精神病未治療期間と呼ばれている。未治療期間が長いほど予後が悪く、治療に対する反応性が乏しくなることが指摘されている。早期発見により、患者はより軽症段階で治療が開始され、通常治療よりも良好な臨床経過が得られる。初回エピソードの患者の多くは、診断基準を満たすほどの明確な精神病状態を呈する前から苦痛や機能障害を伴う精神症状(前駆症状)を示す。この頭在発症前の前駆期での早期発見と早期介入の重要性が国内外で認識されつつあるところである。

幻覚や妄想などの精神病症状の一部が、精神病患者のみならず、一般人口中に広く体験されている可能性が示唆されている。このような一般人口中時折みられる精神病様症状体験(psychotic-like symptoms: 以下 PLE)と精神病の危険性との関係性が関心を持たれるところである。5000人以上の一般の中学生における調査で15.2%のPLEが報告されている(Nishida et al, 2008)。また、一般高校生328名に妄想的観念の体験率を調査したところ、全40項目を平均すると、13.5%であった(佐藤と松井、2007)。さらに、富山医科薬科大学(大学統合前)では大学生のメンタルヘルスのための取り組みとして1998年より新入生全員を対象としてミネソタ多面的人格目録(Minnesota Multiphasic Personality Inventory: MMPI)が施行されてきた。1600名(6年間分)の解析結果から、3.7%が統合失調症と親和性の高い傾向が示された(松井ら、2006)。精神病様体験はある意味、人間に潜在的にはかなり認められることであり、それが顕在化し、持続することによって疾患につながっていくことともいえる。今後、このような基礎的研究から、早期発見や早期介入への取り組みにつなげていくことが重要と思われる。統合失調症では、自己所属感の障害、すなわち「自己の活動や状態が自分のものとして体験されずに、他人から支配されるものとして体験される」症状である(Schneider, 1939)、自我障害が特徴ある症状である。これは人間がもっている自己の意志や意図にかかわることであり、自己と他者の関係において体験されることともいえる。また、いわゆる陽性症状や陰性症状とは別の次元で、日常機能や社会機能と密接に関係してくると思われる認知機能の障害も見逃せないことである。ここでは、この疾患の認知機能の特徴や脳と行動の関係の観点からの研究および現在取り組まれている治療や予防的取り組みの動向について紹介した。

パネルディスカッションでは、統合失調症に関連した背景にある基礎的考え方(神経科学の立場：西条と認知科学の立場：佐藤)について論じられ

た。また、大学生の精神にかかわる事項で、富山大学で取り組まれているアプローチに関して、高機能発達障害支援（斎藤）と自殺予防（角田）の紹介がなされた。下記に各々の要約を示した。

### 1. 統合失調症の動物モデルを用いた検討（西条寿夫、富山大学医学薬学研究部システム情動科学）

統合失調症の病態として、これまで遺伝子変異、薬理的病態モデル、環境障害、およびエピジェネティックな要因など様々な原因が報告されている。これらの病態は、最終的にはシャンドリア細胞など parvalbumin 陽性 GABA 作動性ニューロンにおける NMDA 受容体の機能低下をもたらす。この parvalbumin 陽性 GABA 作動性ニューロンは、NMDA 受容体が賦活されると抑制性神経伝達物質である GABA を放出し、30-80 Hz の同期的ニューロン活動（ガンマオシレーション）を起こす。したがって、統合失調症による NMDA 受容体の機能低下は、GABA 放出を減少させ、GABA 作動性神経回路におけるガンマオシレーションを障害する。このガンマオシレーションは、前頭葉における様々な認知機能の神経基盤をなしており、この過程の障害により統合失調症の認知障害や陰性症状（社会行動の低下、情動表出の低下、モチベーションの低下）が発現する。したがって、薬物による治療では、parvalbumin 陽性細胞の活性を亢進させて、ガンマオシレーションを増大させることが求められる。

当研究室では、サルおよび遺伝子改変動物を用いてこれらの点を研究しており、これまで 1) NMDA 受容体機能を遮断する PCP (phencyclidine) をサルに慢性的に投与するとヒトの陰性症状様行動が出現する、2) PCP に最も感受性が高い前頭前野（前部帯状回皮質の脳梁膝前部）ニューロンは、種々の社会行動に応答する、3) 統合失調症関連遺伝子の一つである血小板由来成長因子β受容体 (PDGFR-β) 遺伝子のノックアウト動物では、parvalbumin 陽性細胞が減少するとともに、ガンマオシレーションおよび社会行動の障害が認められる、4) 新規合成薬をこのノックアウト動物に投与するとガンマオシレーションの障害が改善することなど明らかになっている。

### 2. 主体としての「私」の感覚はどのように生まれるか？（佐藤徳、富山大学人間発達学部）

行為を行っているのが自分であるという感覚、すなわち、行為主体感がどのように成立するかについて論じた。どのように行為主体感が成立するかに関するモデルは、まず、この感覚が欠如していると考えられた統合失調症の幻聴や作為体験の研究から生まれた。そのモデルではこれらの症状の背景には、順モデルの失調があると考えられた。

我々が行為を実行する場合、運動指令が四肢に伝えられ、実際に筋肉が動くとともに、運動指令の遠心性コピーに基づいて動作の次の状態や動作の感覚結果が予測される。この予測に関わっているとされているのが順モデルである。こうした順モデルがあるからこそ、我々は感覚フィードバックを得る前に、意図と予測を比較することで、速やかに動作のエラーを修正し、それを修正することができる。また、自己運動に伴う感覚を減衰させて、限りある注意資源を外界に由来する感覚に振り分けることも可能となる。しかし、幻聴や作為体験のある統合失調症患者では、自分で自分をくすぐっても他人にくすぐられるのと同程度くすぐったく感じられることが明らかとなっており、これらの症状の背景に順モデルの失調がある可能性が支持されている。

しかし、別のモデルも存在し、そのモデルによると、誰が行為主体であるかの判断は、事後的な推論に基づくものであり、実際の因果関係とは関係なく、思考が引き続く行為やその結果と一致し、他に考えられる原因が見当たらなければ、行為者は自分に帰属されると考えられている。なお、両モデルを統合するモデルも考えられる。

### 3. 発達障害大学生支援への挑戦（斎藤清二、富山大学保健管理センター）

発達障害大学生への支援は緊急の課題であるが、現在までのところ学術的報告としては、事例報告あるいは総説が散見されるに過ぎない。ここでは、富山大学において4年間にわたって実施された発達障害大学生支援プロジェクトにおいて、アクション・リサーチの成果として得られた、大学における発達障害学生支援システムの構築と運営に関する知識資産を提示する。

平成19年度文部科学省学生支援GPの助成を受けた『「オフ」と「オン」の調和による学生支援』に基づいて、高機能発達障害傾向のある大学生への包括的支援を目的とした学生支援システム「トータル・コミュニケーション・サポート」を構築した。オフライン支援としては、トータル・コミュニケーション支援室を設置し、学内における多様なリソースをコーディネートする中核組織とした。オンライン支援として、富山大学 PSNS と名付けられた Web 支援システムを構築、運用した。プロジェクトの理論的基盤として、Nonaka らの提唱した「知識創造動態モデル」を採用し、4年間にわたり支援システムを漸進的に構築・運用し、アクションリサーチの手法を用いて質的に分析し、知識資産の提示としてまとめた。

結果、発達障害大学生支援システムにおけるコンセプトあるいはスキルとして、複数の知識資産が浮かび上がった。とくに、1) 発達障害大学生の診断をめぐる問題を緩和するためのコンセプトと

しての「高機能発達不均等」、2) 発達障害大学生への個人的支援の方法論としての、「ナラティブ・アセスメント」および「心理教育的アプローチ」3) 障害者の権利保障と大学における現実的な支援の実践を調和させるモデルとしての「合理的配慮の探求プロセス」の定式化、について報告した。結論として、発達障害大学生支援システム構築と運用における、知識創造動態モデルに基づくアクション・リサーチの有用性が浮かび上がった。

#### 4. 人との「つながり」について —富山大学自殺防止対策室の活動を通じて— (角田雅彦、富山大学附属病院神経精神科)

気遣い—気遣われる人々との「つながり」の中で、自分にとって大切と思えることを行い、それに意味を見いだせる人は安らぎを得ることができる。また、人との「つながり」の中で、自分は人に気遣われているということを実感できる人も安らぎを得ることができる。多くの人々は、人とつながり気遣い—気遣われて生きている。しかし、いろいろな問題で追いつめられ、心の視野が狭くなり、自分が人とつながっていて、気遣われて生きていると実感できない状態になった人が、死を選ぶと思われる。

富山大学では、2008年と2009年で合わせて7人の学生が自殺で亡くなっており、自殺死亡率が全国平均の3.5倍にもなったことから、2009年12月に「自殺防止対策室」を設置し、次の5つの活動を行った。①自殺した学生の背景の収集と解析、②全学部の教授会での自殺防止FD研修会の実施、③新入生への自殺予防講義、④外部講師による自殺防止啓発講演、⑤「学生何でも相談窓口」の設置：各キャンパスにコーディネーターを配置し、何でも相談できる体制を作り、コーディネーターには心理士やPSWを配置し、種々のことで悩んでいる学生のメンタル面のチェックを同時にすることによって、自殺のリスクのある学生の早期発見に努めた。その結果、活動を実際に行って行くうちに、大学教職員の自殺予防への意識が高まっていき、2010年度の自殺者数は0人となった。

ポストベンションとして、以前に亡くなった学生の命日に、御両親と共に御参りをさせていただいた。御両親は2時間近く亡くなった学生の小さな頃からの懐かしい思い出を語られた。語っても語っても語り尽きない様子で、御両親の心情を察すると胸が引き裂かれる思いだった。同時に感じたことは、亡くなった学生は、御両親との強い「つながり」の中で生きてきて、今も御両親の心の中でつながっているということだった。

### Ⅲ. 日本学術会議会員・連携会員コーナー

#### 「日本学術会議と東日本大震災」

後藤 俊 夫

(第3部会員・副部長：中部大学副学長)

平成23年3月11日に東日本大震災が発生し、東北を中心とする東日本地域に未曾有の大災害をもたらした。この大災害に対して国内外の多くの組織や個人が救援活動や復興活動に大きな貢献をしてきた。

我が国の科学・技術あるいは学術の統括的立場にある日本学術会議も、大震災発生後直ちに会長のもとに「東日本大震災対策委員会」を設置して活動を始め、福島原発災害を含む大震災に関していくつもの緊急提言等を発出してきた。また、日本学術会議内の委員会や分科会もそれぞれの立場で各種の活動を進めてきた。私も第三部副部長として「東日本大震災対策委員会」に加わり、日本学術会議全体の活動に関わってきたので、本稿でそれらの活動の一端について紹介する。

#### 1. 東日本大震災に関する日本学術会議からの緊急提言

下記の表は、東日本大震災発生後の約3ヶ月間に日本学術会議から発出された緊急提言等をまとめたものである。なお、これらの緊急提言の詳細は日本学術会議のホームページに掲載されているので、それを参照していただきたい。

- ・幹事会声明 「東北・関東大震災とその後の原子力発電所事故について」
- ・「今、われわれにできることは何か？」に関する緊急報告
- ・東日本大震災に対応する第一次緊急提言
- ・第二次緊急提言「福島第一原子力発電所事故後の放射線量調査の必要性について」
- ・第三次緊急提言「東日本大震災被災者救援・被災地域復興のために」
- ・第四次緊急提言「震災廃棄物対策と環境影響防止に関する緊急提言」
- ・第五次緊急提言「福島第一原子力発電所事故対策等へのロボット技術の活用について」
- ・第六次緊急提言「救済・支援・復興に男女共同参画の視点を」
- ・東京電力福島第一原子力発電所事故に関する日本学術会議から海外アカデミーへの現状報告



大震災後、まず幹事会声明として、3月18日付で「東北・関東大震災とその後の原子力発電所事故について」を発表した。

同時に、3月18日に緊急集会を開いて対応策を討議し、「今、われわれにできることは何か？」に関する緊急報告」を出している。

その後、「東日本大震災に対応する第一次緊急提言」を発出した。この提言の中では、自治体間の「ペアリング支援」の重要性が提案されており、政府や地方自治体の大震災対応策にも大きな影響を与えた。

上記の3つは大震災に対する全体的な視点からの提言であるが、第二次緊急提言以降は科学・技術的視点やジェンダー的視点からのより具体的な提言になっている。

第二次緊急提言「福島第一原子力発電所事故後の放射線量調査の必要性について」は、専門家の立場から、福島原発発後の情報不足のなかでいち早く系統的・組織的な放射線量調査の必要性を提言したもので、その後の政府の対応策にも活かされたと思われる。次いで、第三次～第五次緊急提言として、それぞれ、「東日本大震災被災者救援・被災地域復興のために」、「震災廃棄物対策と環境影響防止に関する緊急提言」、「福島第一原子力発電所事故対策等へのロボット技術の活用について」が発出された。これらは、第三次提言にジェンダー的視点が一部含まれてはいるが、主として科学・技術的視点からの提言である。

それに対して、第六次緊急提言「救済・支援・復興に男女共同参画の視点を」は、ジェンダー的視点からの提言で、人間の安全保障とジェンダー委員会等が中心となってとりまとめ、東日本大震災対策委員会を通して発出された。

その後、海外に向けて、「東京電力福島第一原子力発電所事故に関する日本学術会議から海外アカデミーへの現状報告」（和文及び英文）も発信されている。

## 2. その他の活動

日本学術会議内に設置された多くの委員会や分科会も福島原発を含む東日本大震災に関する様々な活動（提言の発出や講演会・シンポジウムの開催等）を行っている。ここでは、それらのなかの代表的な一例だけを紹介する。

2011年6月11日（土）、日本学術会議講堂において、『6.11 シンポジウム「災害・復興と男女共同参画」～災害・復興に男女共同参画の視点を～』が開催された。主催は、「災害・復興と男女共同参画 6.11 シンポ」実行委員会及び日本学術会議人間の安全保障とジェンダー委員会であった。参加者は300名を越す盛況で、災害とジェンダーに関する国民の関心の高さが示された。本シンポジウムのプログラムは以下の通りである。

ここでは講演題目だけを記載し、講演者氏名等は割愛する。

### (1) 基調講演

- ・「東日本大震災を理解する上でのポイントと男女共同参画の視点で見た課題」
- ・「災害と男女共同参画をめぐる国際的潮流」

### (2) 被災地からの報告

- ・ビデオインタビュー
- ・「未曾有の震災から復興に向けて」
- ・「東日本大震災と看護」

### (3) リレートーク

- ・「現場から：私は訴えたい」
- ・「東日本大震災と女性の活動」

### (4) パネルディスカッション「復興と男女共同参画」

- ・「災害復興における制度設計と生活再建をめぐるジェンダー課題」
- ・「戦後日本型の経済開発が災害に脆い社会を作った」
- ・「復興に向けた科学・技術のあり方—環境及びジェンダーの視点を中心として—」
- ・「女性の支援活動から復興に向けた提言」

### (5) 提言に向けてのまとめ

講演の多くは、大震災の復旧・復興活動に直接関わってきた立場から、大震災現場の状況と問題点について延べ、女性の意思決定機関への参加やジェンダー視点の強化の必要性を主張している。総合討論でも活発な議論が行われ、本シンポジウムは参加者にとって有益な会になったと思われる。

## 3. 今後に向けて

日本学術会議は、現在まで、東日本大震災に関する当面の緊急課題について必要な活動を行ってきた。それらは現時点で推進すべき最も重要な課題であるが、多くの科学者・技術者を擁する日本学術会議にとって今後より重要になるのは、中長期的な視点からのエネルギー政策や新技術の開発に関する提言等を発出していくことである。中立の立場に立って社会に有益な提言等を発出していくことは、社会が日本学術会議に最も期待する役割であり、我々はその社会からの負託に応えていかななくてはならない。中部地区の会員及び連携会員の方々にも、それぞれの立場や専門性を活かして、これらの活動に積極的に参画していただきたいと考えている。

## 「第 20・21 期の学術会議での 活動を通して」

小川 眞里子

(連携会員：三重大学人文学部教授)

とくにテーマをいただきませんでしたし第 21 期も残り少なくなりましたので、今期の活動を中心にご紹介してまとめにしたいと思います。

私の専門は科学史というマイナーな分野ですが、学術会議には少数ながら科学史や技術史分野の先生がおられ分科会活動を通してご一緒に仕事をさせていただきました。私が属する分科会は史学委員会の下にあり、「科学・技術の歴史的理論的社会的検討分科会」と「科学史上の重要理論の現代的影響検討分科会」というどちらも恐ろしく長い名称のついた 2 つの分科会です。前者は哲学委員会の一部の先生と合同で構成されており、いわゆる科学史・科学哲学の協働の場として立てられたもののようです。科学技術の研究は日進月歩ですから、古いものは容赦なく捨てられていきます。そこで歴史的資料の保存について木本委員長の下で若干の試行的アンケート調査が行われました。最先端の研究者から見るとゴミのようなものでも、実は歴史研究には大切であったりするのですが、昨今保存のスペースの確保はいつそう厳しいものがあるようです。今回これについて具体的な提案には至りませんでした。科学史分野として継続して注視しなければならない問題だろうと思います。

今年は東日本大震災の後を受けて 6 月上旬に会議を開き、哲学と史学の研究者が合同で何か発信できる場をとということになりましたが、史学よりは哲学委員会の先生方が中心になって企画され「原発災害をめぐる学者の社会的責任—科学と科学を超えるもの」でもって、9 月半ばにシンポジウムを行うことになりました。

地震・津波災害からの復興に向けてさまざまな取り組みはなされてきていますが、真正面から原発事故を学者の社会的責任と受け止めて打ち出した企画は、学術会議のシンポジウムとして異例かもしれません。私自身スリーマイル島原発事故やチェルノブイリ原発事故の後にはコルディコット『核文明の恐怖』をはじめ高木仁三郎さんの本など幾冊もの本を読み、原発は人間の生活と共存することのできない技術だと確信しました。しかし、地球温暖化の問題がクローズアップされるにつれ、世の中の空気が原発肯定的になっていくのを苦々しく思いながら過ごすだけでした。二酸化炭素は

出さなくても放射能を出すのにと、つぶやくに終わっていた自分に大変情けない思いです。

死者行方不明者合わせて 2 万人超という未曾有の犠牲をもって示された地震と津波の被害、そして直接にはそれに起因すると当初見られはしましたが、人災的要素が目を追うごとに大きく認識されるようになった原発事故。事故後に周辺地域から避難を余儀なくされ、5 年も 10 年も帰宅の見込みのないままに不安な生活を送らざるを得ないことになった被害者。科学的制御を超え、子々孫々に核廃棄物の負担を残していく原発の恐ろしい本質をしっかりと見据え、この機会に日本は方針転換を図らねば後がありません。

トランス・サイエンスの時代を象徴するような事態に直面し、「原発災害をめぐる学者の社会的責任」というのは、原子力発電の技術開発といった理系の問題というよりは、そうした巨大技術を抱える現代の政治、経済、社会の問題であり、私たちの人生の価値観が問われている問題と言うべきでしょう。この最後の点でまさしく哲学の実り多い議論が展開されて、人文系の研究者が社会に発信する場になって欲しいと思います。

2 つの分科会の後者は、ダーウィン生誕 200 年、『種の起源』出版 150 年を記念して 2009 年に学術会議主催の公開講演会を行うことを企画・検討する場として機能してきました。シンポジウム当日の会場には『種の起源』の初版本が飾られ、特任連携会員の松永俊男先生のご尽力でダーウィンの数々の著作も展示されました。遠く九州からの参加もあり、ダーウィンファンを自認する人々がとてつもなく多いのだということに驚かされもしました。会場は熱気に包まれ成功裏に終了しました。今年になって学術会議叢書『ダーウィンの世界』としてシンポジウムの内容はまとまりました。本年 2011 年は、夫亡き後マリー・キュリーが 2 度目のノーベル賞（化学）を受賞した 1911 年から 100 年で、国際化学年としていろいろなイベントが行われていますが、21 期は残り少なく、次は新任委員さんによる企画となります。

上記 2 つの分科会とは別に私には楽しみな分科会がもう一つありました。「歴史学とジェンダー」分科会です。ジェンダー関連の分科会は社会学系教員によるものが活発な活動を展開してきており、20 期の締めくくりとして 2008 年 1 月には歴史学と合同で公開講演会「人口とジェンダー：少子化対策は可能か」を行い、事前申し込みが 300 を超えるという大反響で、講演会の内容は学術会議叢書『性差とはなにか』の一部を成すことになりました。これはこれで大成功でしたが「歴史学とジェンダー」分科会は、21 期には歴史学独自の課題への取り組みに意欲を燃やしました。高等学校で用いられている歴史教科書をジェンダーの視点から洗い直し、最終的にはサブテキストを作成する

課題です。これについては最後に再度立ち戻ります。

21期の公開シンポジウムとしては「歴史教育とジェンダー—教科書からサブカルチャーまで」(2009年12月)、「歴史認識を変える—歴史教育改革とジェンダー」(2011年7月)の2つを「歴史学とジェンダー」分科会の独自の事業として行いました。両方とも私自身は裏方で、いわゆる歴史教育の本流にどんなに問題が山積しているかを学ばせていただくよい機会となりました。たとえば日本史では、多くの側室との間に50名をこえる子女がいたりもするのに、教科書では「武士の家では、跡継ぎを得るために妻以外の女性を迎え入れることも行われていました」とか、さらりと書かれているのです。教科書はぎりぎり言葉をそぎ落としているので「將軍や大奥の生活は華美となり」と書かれても大奥の説明など一切ありません。「肉欲」をベジタリアンの反対くらいに想像していた高校時代の私には、「遊里」なんてプレイランドのイメージだったなと今にして思うのです。セクシュアリティはしっかり隠蔽されているのです。セクシュアリティとほとんど関係のない科学史分野の私にはとてもそのことが新鮮でした。

この分科会は10名ほどのメンバーですが、各自の専門分野は西洋、東洋、日本、そしてアフリカと地域もそして時代も多彩です。人間の歴史に男女がともに存在したように、世界のどの地域もそれぞれの歴史をもって等しく存在してきているのですから、男性中心的な歴史記述に反省が求められると同じように、西欧中心の歴史記述に対する批判も分科会では強く打ち出され、つねに議論になってきています。

2009年に行ったシンポジウムに関連して『歴史教育とジェンダー』(青弓社)をまとめることになり私も科学史に関連して分担執筆をすることになったので、高校の世界史、物理、化学、生物のかんりの数の教科書を取り寄せて見直してみました。大判になり図版も豊富で外見は変わってきていますが、中身はそれほど変わってきているようには見えません。世界史に登場する女性科学者はいつもナイチンゲールとマリー・キュリーの二人です。ナイチンゲールはあくまでも白衣の天使としての記述ですが、彼女の衛生統計学的貢献がもっと評価されるべきだと思います。マリーについては夫ピエールに従属する扱い、すなわち未亡人になってもずっとキュリー夫人としてしか記載されなかった状況からは脱却し、マリー・キュリーという扱いになっています。そのほか生物の教科書にはレイチェル・カーソンやロザリンド・フランクリンの名前の挙がるものもありますが、DNAの構造決定にX線結晶解析で貢献したフランクリンは囲み記事の扱いです。囲み記事の扱いについては、日本史や世界史の先生からも問題が上げられていま

す。要するに歴史の流れから切り離して、補足的に言及されるべきではないということです。フランクリンの掲載は生物の教科書ですから、若干扱いのニュアンスは異なりますが、無いより益し程度の認識ではいけないのです。

話を先のサブテキスト作成に戻しますと、これは連携会員の三成美保先生の熱心なご尽力に負うところが大きく、周到に用意された原案をもとに喧々譁々の議論を経て章タイトルや項目そしてその下の具体的な見出し90個をほぼ決めたところです。広く高校の歴史教育について新しい提言となるサブテキストの作成は21期を超えて継続し、執筆の分担はこのまま維持されます。歴史といってもやや特殊な私の場合、学会組織では出会うことのない先生方との交流は学術会議ならではのことであり、「歴史学とジェンダー」分科会から大きな刺激をいただいたことに感謝しています。

学術会議ならではの分野横断的な交流がもっと促進されなければならないと感じています。同じ歴史学のくくりでも距離は大きく、それだからこそ一緒に仕事をさせていただけたのは楽しい経験でした。またそうした意味合いから言えば、科学史のような分野はもっと文理融合的方向に貢献することが期待されているわけで、今後は私個人の仕事の中でも努力を続けていきたいと考えています。

## IV. 日本学術会議中部地区 科学者懇談会コーナー

### 「日本学術会議第 159 回総会 傍聴報告」

中 嶋 芳 雄

(科学者懇談会富山県幹事・  
富山大学大学院理工学研究部教授)

日本学術会議第 159 回総会は、去る平成 23 年 4 月 4 日 (月) ~6 日 (水) の 3 日間、東京メトロ千代田線「乃木坂駅」傍の日本学術会議 (Science Council of Japan) <東京都港区六本木>にて開催された。そのなかで、全体会議となる総会は 4 月 4 日と 5 日の両日で、合計 3 回開催された。第 1 回目は 4 日の 10 時からの開催であった。会場までのアクセス時間を考慮して、私は 3 日の総会開催日前日に上京した。その日は 5 月の日差しを思わせるような暖かい日和であった。富山市内の桜は開花を迎える直前の、蕾を一杯にふくらませた状態であった。

一方、東京は既に桜の花もほころんでおり、乃木坂の日本学術会議前の桜は既に満開であった。そこで、翌日の総会傍聴を控え、まずは「品川駅」の傍のホテルに本拠地となる宿泊地を置いた。

さて初日の総会の当日、まず最初に会場受付にて、学術会議用の厚くて膨大な資料を受け取った。総会会場は 1 階であった。大階段教室を思わせるような大講堂である。日本学術会議総会の傍聴経験は、実は今回で 3 回目となる。第 1 回目は 8 年前に開催された第 139 回総会である。その際の総会出席者に対する第 1 印象は、年配者が多いなァーという感であった。後で聞いた話だが、その時の日本学術会議会員の平均年齢は 63 才であったそうである。第 2 回目は、4 年前に開催された第 150 回総会である。第 2 回目の総会出席者に対しては、年配者が多いなァーという印象はそれ程感じなかった。4 年間の間に、自分自身も年を取ったのか、あるいは総会出席者が大幅に若返ったかは定かではない。また女性参加者が倍増していたという印象も残っている。そして今回の第 159 回総会が第 3 回目となる。今回も女性参加者が一層多くなったという感があった。また席のあちらこちらには、顔馴染みの参加者もおられた。今回の総会傍聴者は約 20 名程度であった。

さて、初日の 4 月 4 日 (月) の総会は、午前 10 時より、議長 (第 20-21 期・日本学術会議会長 金澤一郎氏) の議事進行のもと、開会となった。定

足数 105 名のところ、119 名の出席があった。第 1 回目 (第 139 回総会) 並びに第 2 回目 (第 150 回総会) と比較して、今回の総会 (第 159 回総会) では、空席が多く見られた気がした。

まずはじめに、総会は今回の東日本大震災に対する黙祷より始まった。その後、総会用の多くの配布資料に関する説明があった。次いで会長より、これまでの活動状況に関する報告があった。

その後、各副会長からの簡単な報告となった。先ず大垣眞一郎副会長が科学者委員会の活動に関する報告を、次いで鈴木興太郎副会長が「知の航海」シリーズ発刊に関する報告を、最後に唐木英明副会長が国際関連の主な活動に関する報告を行った。会長からの活動状況報告並びに各副会長報告は 11 時に終了した。引き続いて、日本学術会議連携会員で、2010 年のノーベル化学賞受賞者でもある根岸英一氏 (パデュー大学特別教授) による

「Magical Power of d-Block Transition Metals: Past, Present, Future」と題した特別講演が始まった。そのなかで、今回の「東日本大震災」についての言及があった。すなわち、多くのかけがえのない人命や貴重な財産の喪失があり、真に残念なことではあるが、“Life must go on”である、と。この言葉が大変印象的であった。

その後、根岸先生の専門である触媒の話となった。今後、社会がより持続可能な社会システムを構築するためには、“Green Chemistry”あるいは“Green Science”がより一層大切になる。その点では、触媒は大変経済的であり、また有益なものであるとも述べられた。また自分自身のポストドク時代、大学助手時代、大学助教授時代の話を交えながら、有機合成化学についても言及された。そのなかで『先輩達が数十年前に発見した、「大発見」を、その後も何十年も掛けて、後輩がまた辛抱強く続けておれば、再び新発見に至る可能性が出てくるものですよ。また基本的な概念 (木の根っこのようなもの) を一旦捉えると、その後の実りや果実は実に大きいものですよ』と述べられた。この言葉は小生にとっては特に印象深いものであった。

特別講演を含めた初日 (第 1 日目) の午前の総会は昼 12 時に閉会した。午後の総会は 13 時 30 分より開始された。外部評価書報告に始まり、次いで審議経過報告等へと続いていった。第 1 日目の午前及び午後の総会に対する全体的な印象は、報告や審議事項が多いためかも知れないが、きわめて形式的に淡々と進められたという感が強かった。

会議 2 日目は、四月なのに五月晴れを思わせるような晴天の一日であった。金澤会長の議事進行のもと、13 時 30 分より、第 3 回目の総会が開催された。

先ず、各部会報告が行われた。次いで「東日本大震災」に関する議論がなされた。その後日本学

術会議の機能強化に関する報告、自由討議等へと続いていった。

第3回目の総会にて特に印象的だった討議は、以下の通りである。すなわち、「日本学術会議の組織や取り決めは、平時に作られたものであるために、今回の東日本大震災のような緊急時に対しては、対応が非常に悪いように思われる。そこで今回のような非常事態を大いに参考として、今後、非常時に対するスキームを平時より作っておき、今回のような非常事態においても、速やかに提言等の対応ができるようにしておくべきである」、あるいはまた「日本学術会議には2つの大きな役割がある。その1つは、日本の進むべき方向性を示すための、1つの砦となることであり、もう1つは、国民や国が進むべき方向、あるいは取るべきプランに対して、例えばA案ではこのようなメリットとデメリットが考えられ、一方B案ではということが考えられるという、アクションプランを立案することである」等の印象深い討議がなされた。

日本学術会議は、国民に向けて発信でき得る体制を作り上げることが何より緊急の課題といえる。日本国民は今、正にそれを待っているといえよう。

第159回総会は、2日目の16時に終了した。

以上が、今回の総会を傍聴して小生が想った印象並びに感想である。

第21期 日本学術会議中部地区会議  
 運営協議会委員名簿  
 (平成20年10月1日～平成23年9月30日)

科学者懇談会幹事一覧

(平成23年6月24日現在)

(平成23年6月24日現在)

関係部	氏名	勤務先
第1部	直井 優	(株)原子力安全システム研究所
	野村 眞理	金沢大学
	小川 眞里子	三重大学
	西村 直子	信州大学
第2部	小原 雄治	情報・システム研究機構、国立遺伝学研究所
	斎藤 成也	情報・システム研究機構、国立遺伝学研究所
	江崎 孝行	岐阜大学
	松井 三枝	富山大学
第3部	後藤 俊夫	中部大学
	巽 和行	名古屋大学
	林 勇二郎	国立高等専門学校機構
	福田 敏男	名古屋大学

県名	氏名	勤務先
富山県	中嶋 芳雄	富山大学
	竹内 章	富山大学
石川県	前田 達男	(金沢大学名誉教授)
	山崎 光悦	金沢大学
福井県	山本 富士夫	(福井大学名誉教授)
	森 透	福井大学
長野県	奥村 幸久	信州大学
岐阜県	高橋 弦	岐阜大学
	荒井 聡	岐阜大学
静岡県	荒木 信幸	静岡理工科大学
	石井 潔	静岡大学
愛知県	丹生 潔	(名古屋大学名誉教授)
	水谷 照吉	(名古屋大学名誉教授)
	和田 肇	名古屋大学
三重県	後藤 正和	三重大学
	井口 靖	三重大学

\*\*\*\*\*  
 \* 日本学術会議中部地区会議学術講演会のお知らせ \*  
 \*\*\*\*\*

平成23年度第2回日本学術会議中部地区会議学術講演会を  
 下記のとおり開催いたしますので、お知らせいたします。

記

日時：平成23年11月11日(金) 13時～16時  
 場所：静岡大学静岡キャンパス

中部地区会議に関すること } は右記へ  
 科学者懇談会に関すること }

日本学術会議中部地区会議事務局  
 〒464-8601 名古屋市千種区不老町  
 名古屋大学研究協力部研究支援課内  
 TEL (052) 789-2039  
 FAX (052) 789-2041

※日本学術会議の活動についてはホームページ URL : <http://www.scj.go.jp> をご覧ください。